

## 第二部 幼き魔女の傀儡達

\*\*\*\*\*  
 今日は何かとドタバタした一日だ。学校がなかったのは実に不幸中の幸いである。とはいえ、これでこの一日が終わるとは限らないから、人生という奴は油断ならない。

デイナーザードは売上にほとんど貢献しない事実上の居候に食事を与え、シャービス亭本来の細々とした仕事を片付け、最後に『臨時休業』の看板を表に出して、再び鶴ちゃんの所に向かった。少し足早だ。あの少女はやはり気になる。フウルウの態度から見て、大事に至ることはないと思う——何だかんだ言っても、デイナーザードはあの男を買っているのである——が、彼の与太話を真実とは思えない。同時に、欠点の多いあの男は、つまらない嘘を連呼する馬鹿ではないとも思う。嘘をついているにせよ、それ相応の理由があるはずだ。つまり、あの少女がワケアリなのは事実だろう。……というか、あの歳で旅をしていて、見知らぬ土地の旅亭で問題発言を連発しては、いきなり倒れ込む黒ずくめの少女が尋常な人生を歩んでいるはずがない。

いつの間にか、鶴ちゃんの寝息は安定していた。一時は間歇泉を連想させる不吉な呼吸をしていたものの、今や、すやすやという擬音語すら聞こえそうだ。デイナーザードは一息吐いてから、少女の脈を確認する。正常だった。

——問題ないわね。

デイナーザードは医者に見せる必要もないと判断した。昔、色々あって、こういう事には自信がある。しかし、一方で嘆息する自分がいることに気付く。成程、残念だ。この娘に何かあれば、ピヤオ・フウルウを八つ裂きにしてやれたのに……。

「……おししようさまあ……」

「おやまあ」

甘える様な寝言、そして、垣間見せた鶴ちゃんの満ちたりた表情に、デイナーザードはちよつとびっくりした。鶴ちゃんとは、この部屋に運んでから、譚言混じりに、二、三言しか話していないが、それでも礼儀正しく、凜とした聡明な少女だった。何より、フウルウの少女を語る態度は、鶴ちゃんが幼さに似合わぬ深い教養と強い精神の持ち主であることを示している。そもそも、あの男は子供が好きではない。その上、尋常ではなく気難しい。もし、鶴ちゃんが歳相応の少女なら、もっと突き放した態度をとる筈なのだ。通りすがりの少女にここまで入れ込むという事は、その少女に何らかの形で魅かれたのだ。

ところがその少女は今や媚びこそ含まぬものの歳相応の寝姿だ。保護欲をそそるしどけなさ。フウルウが見たらどんな顔をするだろうか？

「さて」

鶴ちゃんの眠りも浅くなってきた。目が覚める前に汗を拭いておこうと、デイナーザードが鶴ちゃんの服を脱がし、その細い腕を取った時、

「……………?」

彼女は異物に気付いた。しこり——というべきか？ 少女の細い腕の中に奇妙な粘性物体が潜んでいる。もつとよく調べてみようかと、そのしこりらしきものを強く指で押すと、それはデイナーザードの指から逃げる様に鶴ちゃんの皮膚の下を移動していった。まるで指で圧迫された膿が皮膚の下で押し出される様な動きだったが……デイナーザードはそれ

が彼女の指に反応して、逃げていったのだと確信した。

——寄生虫かしら？

だが、デイナーザードの知る寄生虫にしては不可解だ。この辺りには皮膚の下に住む寄生虫はいないし、鶴ちゃんのような健康体——少なくとも肌の状態は完璧に近かった——に寄生するなど聞いたこともない。鶴ちゃんが異郷から来たことを考慮しても、だ。しかし、それは明らかにデイナーザードの指に反応していた。これは間違いない。昔取った杵柄は伊達ではない。デイナーザードがただの反作用と生物的反射を間違える筈がないのだ。そもそも、最初に鶴ちゃんの体の汗を隅々まで拭き取った時、こんなものは見当たらなかった。

「あたしから逃げていた？」

デイナーザードは推論を続けながら、そのしこりらしきものの移動する先を追い続けた。しかし、デイナーザードがそのしこりの動きを捉えようとすると、必ず紙一重の差でそのしこりは彼女の指を躲す。その動きはまるで指の圧迫による反作用で、移動している様にも見える。だが、デイナーザードはそれが擬態であると確信した。少々、むきになって、デイナーザードはそのしこりを追い続ける。だが、しこりはその度に、左腕から、首元へ、さらに、腹部から、右脚へと、素早く移動し、なかなか尻尾を掴ませない。土竜叩きの様な黽ごっこを続けていると……、

少女が目覚ました。

「……………」

「……………」

二人の間を沈黙が支配する。鶴ちゃんは状況を把握するのに戸惑っている様だ。一方、デイナーザードはしこり（らしきもの）を追い続けている内に、自分が少女を押し倒し、覆いかぶさっていることに気付いた。おまけに汗を拭こうとしていたため、鶴ちゃんは半裸で、そのさらさらとした髪は寝乱れ、デイナーザードの指は少女の青い果実の様な四肢をなぞっている。

「きやあきやあきやあきやああっつ！！」慌てまくった少女の叫び声。

「お目覚めかしら？」デイナーザードは少し驚いたが、鶴ちゃんを落ち着かせるため、あえて気取って見せる。「先生のお姫様」

「きやあきやあきやあきやああっつ！！」……残念ながら、効果は薄かった。

もともとデイナーザードはそんなことを気にする性格ではない。あんまり騒ぐので、ついついいつもの癖が出た。今まで、惰性的に握っていた少女の腕を、デイナーザードは器用に、そして、完全に押さえ込んでしまったのだ。

あつという間に鶴ちゃんは少しも身動きが取れなくなる。

「あ……あの……」

状況を把握してきた鶴ちゃんのか細い声を上げる。

——なかなか、そその状態ね。

妖しく微笑みながら、デイナーザードは鶴ちゃんのまだ幼く、それ故に、微妙な線を描く体ときめ細かな肌を思い浮かべた。しかし、何だかここで鶴ちゃんに手を出すと、フルウが五月蠅い感じなので、デイナーザードはとりあえず少女の操を尊重することにした。まあ、ならばせめて、この可愛いお顔の小さくって柔らかかそうな薄朱の唇だけでも奪って

おこうかと、直截的に己の金色の瞳を鶴ちゃんの黒洞の瞳に近付け……。

「ディーナザード……君は何をするつもりなのかな？」

部屋の入口から男が声をかけた。

「ちっ」ディーナザードは露骨に舌打ちしながらも「あらあら、フウルウ……他のお客様の部屋に無断で入り込むとは、どういう了見かしら？ ましてや、女の子が着替えている最中なのよ」

「大きな叫び声が聞こえたから、最優先で駆けつけた」フウルウの声は静かな怒りを湛えていた。「ついでに言うと、着替えというよりは、無理やり脱がされている様に見えるのだが？ 女色家兼好色家のシヤールビス嬢」

「誤解よ。あたしはあなたとは違って、変質者ではない」

「どちらが変質者かは一目瞭然だ。この幼女趣味め……！ 何が『子供に手を出したりはしないわよ』だ？ 一瞬でも信じた私が愚かだった——だが、過ちは繰り返さない」

腕まくりをしながら、フウルウは近付いてくる。彼にしては珍しい行動だった。

「警察に突き出してやる。現行犯で私人逮捕だ」

「本当に違うんだって」信用されないだろうなと思いつつも、一応、ディーナザードは弁明した。「汗を拭こうと思ったら、妙なしこりが有って、それを追いかけていたら、つい」

「あの……」鶴ちゃんは口を挟むが、少女の玲瓏たる声は自己主張には甚だ不向きだった。

「床に押さえ込んだのか？」

「いや、条件反射で……」

「あゝ」

「条件反射？ つまり、君は似た様なことを何度も？」

「失敬ね。あたしが護身術を持ち合わせてちゃいけない？」

「では、顔を近付けていたのは何なんだ？」

「偶然よ」

「なら……」

「そんなことはどうでもいいんですっ！」

少女の朗々たる声にディーナザードもフウルウもようやく意識を鶴ちゃんの方へ向けた。「どうでもいいという事はあるまい」フウルウは肅然と反論した。「鶴、君にもしものことがあったら、私は……私は……一体誰に体内の精霊の調整をもらえばいいんだ？」

「そうよ。そんなことを軽々しく口にしちゃ駄目よ」ディーナザードも厳然と反論する。「同じように弄ぶなら、無垢な乙女よりも、無垢であろうとする乙女の方がずっと魅力的なんだから」

「……いいから、まずどいて下さい！ ディーナザードさん！」

ディーナザードにとっては初めて聞く鶴ちゃんの怒鳴り声である（ついでにいつの間にか『アルシヤールビスさん』から『ディーナザードさん』に昇格していた）。流石のディーナザードも渋々といった様子で少女から離れた。

二人の大人の主張を強引に退ける。どうやら、この世には下手に出ればつけあがる下衆がいることを若い少女は悟ったようだ。慥然とした態度で、鶴ちゃんは乱れた服を直し始める。寝起きであるにも関わらず、彼女はてきぱきとしていた。

いささか、気まづくなった元師弟の二人は、しばらく視線で互いに責任をなすりつけ合

っていたが、しばらくすると、一応、乙女の着替えなのでフウルウは背を向け、ディーナザードはとり上げられた菓子を惜しむ目で半裸の鶴ちゃんを見つめた。

「……と、ところで、ディーナザードさん」何故か、鶴ちゃんは急に頑なな態度を崩し、口元を半ば震わせ、勇気を振り絞る様に尋ねた。「わ、わたし、寝ている間に、何か変なこと言いませんでしたか？」

鶴ちゃんは顔を真っ赤にしていた。余程、少女の『変なこと』とは恥ずかしいらしい。先程の叫び声も、貞操の危機ではなく、その『変なこと』をディーナザードに聞かれたかもしれないという不安に由来するのかもしれない。

——例えば、『あつ、やつ、駄目、フウルウさん！そんなところ！』とか？

一瞬、そんな悪戯心がディーナザードの中で蠢いた。が、收拾がつかなくなりそうだったので無難な答えを返す。

「謔言なら、何度か。でも聞き取れなかったり、意味不明だったり……」そして、ディーナザードは再び妖しい笑みを浮かべる。「そもそも、変なことって、どんなことか、初心なあたしにはわからないからねえ」

フウルウは既に呆れて何も言えないらしい。

「あの、お師匠様がどうのこうのって、言っていますでした？」鶴ちゃんは意外にも具例を挙げてきた。

「いいえ」一瞬、ディーナザードの脳裏に先程のフウルウの注意がよぎった。隣を指差し「お師匠様についてはこの男からから聞いただけ」

「そうですか……いえ、それなら、結構です」ディーナザードの答えを聞いて鶴ちゃんは露骨にほっとした表情を見せ、すぐにいつもの聡明な少女に戻って、恭しく頭を下げた。「つかぬことを伺いました。どうか忘れてください」

……気になる。フウルウに視線で尋ねてみるが、『さてね』と、動作で示して……、急に鶴ちゃんに駆け寄った。

「あつ」

「大丈夫か？」

見れば、鶴ちゃんがふらついたのをフウルウが支えていた。貧血気味の上、寝起きなのだから無理もない。だが、鶴ちゃんに関してフウルウに先を越されたのは、ディーナザードにとつて屈辱だった。

「ええ。ちよつと、血が足りません」

「……私の方は大分安定している。君の回復を優先すべきではないかね？」

「……そうですね。では、ちよつと、失礼します」

そう言うと、鶴ちゃんはフウルウの額に指を伸ばす。フウルウの方も鶴ちゃんを支えていた腕を離して、鶴ちゃんの行為に受け入れた。どうやら、フウルウにはその意味がわかるらしい。再び、ディーナザードが小さな疎外感を味わっていると、鶴ちゃんが何やら、真剣な表情でブツブツと呟き始めた。

「『……死肉の内の我が同胞よ。兄汝が命の深き扉、統の流れ、ここに示せ……』  
——言霊だ。」

少女の奏でる小さな音階にディーナザードは確信した。間違はなく、言語巫術である。それもかなり高度な。おまけにディーナザードの聞いたことのない祝詞。どうやら、この

幼い少女が巫術師であることは事実らしい。ただし、デイナーザードには二人が何をやっているのか、よくわからない。普通は聞き覚えのない祝詞でも、知っている祝詞から、ある程度、推論できるものだが……：：：鶴ちゃんの祝詞はさっぱりだ。主にフウルウの体内の精霊に干渉している事くらいしかわからない。それに、祝詞の複雑さに比べ、抽實力がやけに小さい。使役している精霊の量自体は結構なもののだが……：：：それだけ、精密な作業を行なっているのだろうか？

そんなことを考えていると突然フウルウが「デイナーザード」と呼びかけてきた。

「……何よ？」いささか後ろめたいデイナーザードは、ちよつとぶつきらぼうになつてしまふ。

「いや、別に私を疑ったことについて、文句が言いたいわけじゃないんだ。勿論言いたいのは山々なんだが……：：：」

と、そこまでは普通に喋っていた。

だが、その後、口を大きく開けて——しかし、息は吸わず、吐き出さず——話す。

『君はたしか読唇術使えたよな？ どこで覚えたかは知らんが』

デイナーザードは怪訝な顔になって、頷いた。

フウルウは息を吐いていないのだから、当然、声は出ていない。だが、デイナーザードは唇の動きで、フウルウの言っていることはおおよそ解せる。ついでに言うと、フウルウの口元は鶴ちゃんからは死角になっており、高度な祝詞に集中している彼女には彼の唇の動きが見えない。そして、それがフウルウの意図するところ——鶴ちゃんには内緒の話をした——ということであることも察せる。その理由は別として。

『男が三人ほど近づいている。しかも、私の知らない相手。ここは現在休業中だろう。不可解だ。しかし、鶴は巫術に集中せねばならん。私もそれに付き合わなくてはならない。そこで君が一階に行つて、見て来てくれないか？』

「はあ？」デイナーザードは鶴ちゃんに隠匿するために、あえて、感嘆詞のみで応答した。

『わかつている。何故そんなことがわかるのか不思議なのは当然だろう。実はね、私、その気配が読めるんだ』

「……：……」

気配ハイパーアリスチャービス たつて、先生。ここはシャーパービス亭——ちゃんとした土壁に囲まれた隊商宿の二階の一室ですよ。どうして、そんなことがわかるんですか？ 先生は単なる歴史学者志望の教師でしょう？

そんな疑問をデイナーザードが沈黙に隠していると、フウルウは一瞬、にやりと不気味な笑みを見せ、またもや口をパクパク動かしてくれた。

『今日の朝から、急に周囲の気配に敏感になった。敏感になりすぎて、ちよつと混乱もしているが、おそらくこれが傀儡の力的一端なんだろう。つまり、鶴という巫術師を後方からの支援あるいは殲滅用言語巫術に徹せさせるための、前線近接格闘……：：：』

「わかった」

興奮気味に口をパクパクさせるフウルウを黙らせて、デイナーザードは階段を下りた。

\*\*\*

あのまま話しては鶴ちゃんに気取られる。また、本当に男がやってきた場合、的確に対応できなくなる。……ついでに自分の異常な状態を嬉々として話すフウルウと、顔を合わせているのはちよつと辛かった。

わからないでもない。もし、フウルウの言葉が事実なら、彼は凄まじい技術を文字通り、その身に体感しているのだ。フウルウも学者の端くれ。専門が異なるとはいえ、そこにある種の歓喜と躍動を見出したのだろう。

しかし、あれは所詮、歪な力だ。

鶴ちゃんの言う通り、あれが結晶細胞を体内に埋め込むことで引き出しているのなら、特に。どんな代償を必要とするかわかったものではない。だから、あまり気分が良くない。いや、デイナーザードにわかっていることが、その師匠であるフウルウにわからないはずがない。ただし、彼は自分の身体を不安がるよりも、己の知的好奇心への刺激を優先している。

——感性の違いか……あたしは学者じゃないし。

そんなことを考えながら、デイナーザードは一階に降りた。そして、ハン・アルリシャービスシャービス亭の来客口の扉に手をかける。

——まあ、全部、先生の勘違いってこともあるしな。

と、淡い期待を胸に秘めていると……。

「ありやま、本当に来ちゃったよ」

「どういう意味ですか？」

男が一人、それもデイナーザードの記憶にない男が開いた扉の向こうに立っていたのだ。鶴ちゃんのような美少女ならばともかく、野郎の顔を一々覚える趣味はない。しかし、自分とは初対面の相手だということにはわかった。

何気ない素振り、周囲の様子を窺う。

フウルウの言葉が正しければ、あと二人いるはずだ。しかし、その姿は見えない。フウルウの勘違いと考えたいところである。が、ここまで来ると流石にそれは甘い見通しに思えてくる。

隠れている——と見るのが妥当だろうか？

「あのさー、休業中だよ」

「理解しています。こちらとしても、ハイン隊商宿としての役割を期待して、ここにやってきたわけではありません」

デイナーザードのつっけんどんな態度に対し、男は懇切丁寧な返答をした。しかし、デイナーザードは眉を顰める。男の言葉遣いが奇妙だったからだ。彼の言葉は昔ながらのフスハー標準語である。だが、これは古すぎる。古臭いとかそういう次元ではない。ほとんど、古典語だ。それも、機械的な。鶴ちゃんの話し方にもそういった傾向があったが、この男の言葉遣いに比べれば、まだまだまともだった。

「見慣れぬ少女が来ていませんか？ 黒尽くめの法衣を着込んだ東方系、十代前半の少女です」

——直球か……こりゃ、本格的に怪しいなあ。

勿論、デイナーザードはそんな内心を表に出さず、「あなた、この村の者ではないよね？」

「それが？」

「ここって、ほら、小さな村でしょう？」と、前置きしてから、ディーナザードは一気に理屈を並べる。それも、フウルウが言いそうな屁理屈を、だ。彼自身は異論があるかもしれないが、それはディーナザードにとって、些細なことである。

「だからさ、どうしても、閉鎖的になりがちなのよ。こんな隊商宿<sup>ハーション</sup>でも基本的に顔なじみ相手の商売が基本。よそ者にはいつい冷たい態度を取りがちなの。この村の経済は外界との交流を必要とせず<sup>に</sup>に成立しうるため、外界との接触の必要性に乏しく、危険性のみが存在している。よって、後者を重んじた対応を選択している——ってな感じかな。あ、この場合の危険っていうのは、窃盗、強盗、人攫いの類ね」

そして、薄い微笑を浮かべると、さすがに紳士然とした男も不愉快そうに顔を歪める。「ここが一定規模以上の街なら、仮にそういった危険因子を内部に招き入れたとしても、豊富な警察力などで排除できるんだけどね。残念ながら、ここって、警官はよぼよぼのお爺さんが一人しかないの。よって、危険因子は内部に入り込む前に水際で撃退するしかない。だ、か、ら、さ。不愉快かもしれないけれど、あなたみたいな見られぬ殿方、特に強姦魔にもなりえる成人男性には注意を払わなくっちゃいけない。ましてや、あたしは純潔なる乙女ですからね」

しばらくの間、沈黙が続いた。微笑の下で、ディーナザードがこの後どう続けようかと冷や汗をかいていると……。

「<sup>サイフ・アル・イクシル</sup>「<sup>イクシル</sup>「お、おいつ」

愛しの鶴ちゃんの大声、続いて、居候の先生の声がそれぞれ響く。

そして、轟音。ディーナザードが音源を辿って、見上げるは頭上。

それはシャービス亭の二階の土壁が内側から爆ぜる音だった。

「ちよ、ちよっと……！」

我が家の損傷に、一瞬とはいえ、気を取られたのは失策だった。

舞い降りる粉塵の下、男の腕が懐に潜り込んだことに気付くのが遅れる。

——短刀？ いや、射刀……やばっ。

男の腕が一閃する。嫌な予感<sup>は</sup>当たって、それは射刀だった。しかも、正確にディーナザードの肉付きの薄い胸元に飛んでくる。

回避は——間に合わない。一瞬の中、やむを得ず、ディーナザードは防衛を選択した。腕を突き出して、身体を守る。腕は確実に犠牲になる。いや、この刀に毒でも塗ってあれば……。最悪の可能性にディーナザードは息を飲む。

しかし、刀がディーナザードの肌を傷つけることはなかった。

ディーナザードと男の間に、突如、粉塵と共に人影が降ってきた。その射刀を巻き込んで、着地する。

その人影は——フウルウだった。

それだけでも、ディーナザードは驚いた。だが、もっと驚いたのは彼が右手で鶴ちゃんの黒衣の首根っこを、そして、左手で射刀の柄の部分を、それぞれ、握っていたことである。

つまり、フウルウは鶴ちゃんを片手で持ち運びつつ、爆ぜた二階の壁穴から、飛び降りつつ、ディーナザードへと投げられた射刀を途中で掴んだ——ということになる。それも、

多分ディーナザードを守るために。

言っておくが、フウルウは軽業師でもなんでもない。ただの小さな村の一教師だ。そして、その運動能力も職責を果たすための程度しかない。当然、こんな化け物じみた動きができる男ではないのだ。——なかったのだ。三日前までは。

射刀を投げた男も驚愕を隠そうとはしなかった。ディーナザードにしても同じだ。これが傀儡になった故の力なのだとすれば——あの鶴の名を冠する魔女は実に凄まじいことをやってのけている。

「……視覚系擬似時間加速能力《カムヤドノマカマナコ神魔の眼》及び筋力系強化能力《カムヤドノチカラ神力の腕》、これではないんだね？ ……なんか頭がガンガンするんだけど」

空から降ってきたフウルウは顔を顰めつつ、己の右手の下にいる鶴ちゃんに問いかける。「では、循環器系強化能力《カムヤドノハヤヒツバサ神速の翼》も併用してください。そうしないと、今回のような急激な運動の際、脳に負担がかかりますから……あのアル||イクシルの背中に生えているものと同じものを使うのは心苦しいでしょうが」

「いや、そんなに一度言われても……大体、ちよつと、乱暴すぎやしないか？」

「《アル||イクシルの手先》を相手に情けは無用です」

「まあ、いきなり、刃物を投げ付けたあたり、結構不穏な相手ではあるのだろうか」

「そうでしょう。あ、あと、フウルウさん、そろそろ、地面に降ろしてください。それと、もう、フウルウさんに《クイ夔》による生理機能補助は必要ありませんから、あの娘を取り出させてもらいます」

フウルウはため息一つと共に少女の黒衣から手を離れた。

すたつと地面に足をつけた鶴ちゃんは右手を水平に真っ直ぐ伸ばした。射刀の男に向かって、法衣のゆつたりとした裾がふさつと広がる。

ディーナザードは袖箭仕込み矢でもあるのかと考えた（どうやら、あの射刀の男も同じことを思いついたらしく、先程のディーナザードと同じ対応をとった）。だが、鶴ちゃんは巫術師だった。平然と祝詞を紡ぎ——内容も簡単で短い——言霊で結ぶ。

「おいで、《クイ夔》」

鶴ちゃんの最後の一言は言霊ではなかった。それはまるで、仲のいい妹に対する普通の呼びかけだった。それによって、引き起こされた事象はその家庭的な声に似つかわしくなかった。

何故か、いきなり、フウルウが「う……！」と小さな呻き声を上げる。

すると、フウルウの腹部——件の傷跡の辺りだ——の単衣が赤く染まった。そして、彼の服の下から、鮮血と共に何か黒いものが出て来たのである。

漏れ出る血液の量は少なく、鶴ちゃんの巫術による血流制御を匂わせていた。が、中から出てきたそのどす黒い物体は控えめに言っても不気味で奇形的だった。爛熟した果実の様にふくれ上がり、粘性液体じみた肉質類の様に蠢き、フウルウの体内から、冬中夏草の如く這いずり出てくるそれは——それを肉塊としか表現のしようがなかった。それは軀から引き抜き取られた臓物の様でありながら、高等哺乳類の脳漿の様であり、また、皮を剥がれたむき出しの筋肉の様でもある。戦車に踏みつぶされた死肉の様におどろおどろしいそれは人によっては正視に耐えぬであろう。フウルウが苦々しい顔をしているのは痛覚からの刺激のみではない筈だ。



結構剛胆なディーナザードもこの事態には声をあげた。

「な、何なのよ？それ！」

「何って、《變》<sup>クイ</sup>ですけど？」

溢れ出してくるそれについて、鶴ちゃんは平然と答えた。

肉塊は無限にフウルウの体に寄生していたわけではない。脇腹から、一定の量が溢れ出すと、彼の失血は納まった。ディーナザードは己の髪を賭けてもいい。フウルウの傷口はわずかな失血と共に閉じていったに違いない。それは刀傷などに対する治療用巫術の施術跡にそっくりの（今朝と数瞬間にフウルウに見せたものと同じ）大きく深いけれども、ありふれた古い傷跡に戻っていったのだ。

一方、肉塊はドロドロと粘性液体が流れる様に、しかし、重力の軛に逆らい、確実に指向性を持って動き回る。何かを必死に求めるようにそれは伸縮運動で移動する。そして、鶴ちゃんがそれに手をかざすと、それは喜び勇んで母に駆け寄り、少女の白い手に這いずりよった。まるで、その肌を蹂躪し、陵辱するかの様にその小さな手に纏わり付く。

そして、それを当然のことに微笑む少女の掌の上で、明らかに移動を目的としていない自律的な、かつ、統御された活動を始めていた。

これも『変態』というべきだろうか？

その肉塊から（流石に赤いものをまき散らしてはいないもの）引き裂かれた細い血肉の繊維が見えない糸巻きで紡がれる様に、また不可視の鑄型によって鑄造された粘土の様にそれは、無秩序で有機的な肉塊から、規則的な構造を取る無機的な結晶に変化し、目に見えぬ物の怪の手で一定の固形に鑄造されていく。

それはどす黒い鎌になった。

交尾のために絡み合った毒蛇の様な二重螺旋の柄は少女の背丈と同じ位の長さであり、薄雲から垣間見える三日月の様な曲線の刃は、ディーナザードの胴と同じ程の大きさがある。形状だけでも、まっとうな農業用の鎌ではない。まさに北方民話に出てくる『死神の大鎌』だ。その材質——と呼ぶべきか否か迷うところだが——は少女の髪と同じ位、深く透き通った闇色の清流でありながら、同時に、邪穢に満ちた泥水の如く濁っていた。しかも、鎌のいたるところに浮き出たむきだしの血管が、元はあの肉塊だったということを中心とするかの様にドクンドクンと脈打っている。そして、その血管は柄と刃の境目の丸い硝子玉の様な部位に繋がっていた。そこだけが、他の部位の様と異なり、肉感性を全く引きずっていない黄昏時の日輪の色をした硝子玉の様な材質だ。だが、そのまともさが一層気味の悪さを引き立てている。あたかも、血肉の海に溺れたヒトの眼ではないのかと錯覚してしまう。

「さて、役者はそろいましたし、始めましょうか」

その鶴ちゃんの言葉に、ディーナザードは初めてその場にいた見知らぬ男の数が、一人から、三人に増えていたことに気付いた。男が二人、ディーナザードの背後、シャービス亭の一階に姿を見せていたのだ。

——…先生にはめられたってことか…。

舌打ちして、フウルウを睨むと、彼は申し訳なさそうに愛想笑いを浮かべた。

状況の異常さに戸惑い、周囲に気を配るのを忘れていたのはディーナザード自身の失態

だ。それも、射刀への対応が遅れたことに続いて、今日二度目の。だが、その己に対する怒りですら、フウルウに向かってしまう。たしかにフウルウは嘘をついたわけではない。男は三人来た。ただ、一人は一階の扉から、ごく普通の訪問客としてきたのに対して、残りの二人は（壁をよじ登りでもしたのか）二階に直接忍び込もうとしていたのだ。相手が二手に分かれていることを察したフウルウは、比較的まともな手段で接触を図ってきた——安全性の高いと思われる——相手をディーナザードに任せ、自分は鶴ちゃんを共に、いきなり不法侵入者として接触を図る——危険性の高いと思われる——役割を担おうとしたのだ。そして、二階でその二人と何らかの理由から、交戦状態に陥ったため、フウルウは先程、鶴ちゃんと共に一階に飛び降りてきた。それを追う二人組は文明人らしく、階段を使つて、シャービス亭の一階に下りてきて……鶴ちゃんの大鎌を目にすることとなったわけだろう。

「……始めるのは話し合いにしたいのだがね……」

二階から降りてきた男の片割れが言った。いきなり、人の刃物を投げ付ける連中には似合わないと言った。だが、よくよく見ると、男たちの表情には、三者三様とはいえ、明らかな動揺の色があった（今まで、《變》の変態を黙って、見ていただけだったのも、その辺りに関係しているのだろう）。この三人も意外と常識人なのかもしれない。少なくとも、あの《變》に対して、平然としている鶴ちゃんとフウルウに比べればの話だが……。

「鶴姫命よ」と、男は鶴ちゃんに呼びかける。「何度も言うようだが、我々は《アルイクシルの手先》ではない。大体、アルイクシルとはあのアルイクシル・デアウスのことか？ 彼は生きているのか？」

「ふん、この期に及んで白を切ろうとは……むがつ」

鶴ちゃんの可愛らしい口がフウルウの手に抑えつけられた。

「こちらにも聞きたいことがある」と、フウルウはモガモガと暴れる鶴ちゃんを無視して、尋ねる。「君達が《アルイクシルの手先》でないというのなら、では、君たちは一体何者なんだい？」

「……」男は黙り込んだままだった。

「ならば、話し合うのは難しくなる。ついでに君達にやましいところがあるのではと疑いたくもなる」

男は渋々と名乗った。「……我々は《小さき神々》、諸君らの言うところの《再生への導き手》だ」

「……なるほどね……」

すぐさま納得するフウルウ。ディーナザードは少し悩んでから、その納得を解した。肝心の鶴ちゃんのみが、きよとんとした顔をしている。

「わかったなら、鶴姫命には我々と共に来ていただきたい。いや、その傀儡の方にもだ。

我々が帝国領内で名乗りをあげることがいかに危険なことか。これは我らの誠意である」

「そう言われても、こちらにはそちらについていく義理はないな。大体、君達が本当に《再生への導き手》であるという保証もない。自分たちの行為を《再生への導き手》のせいにした第三者という可能性もある」

「貴様っ」射刀の男が憤った。

「まあ、落ち着け」とフウルウは制止する。「こちらにはそちらについていく義理はない。しかし、そちらについていけない理由もまたないんだ」

「……」

「実のところ、当方は大変混乱している。それはそちらも同じことではないのだろうか？」

「……否定はしない……」

「そこで提案なのだが、今日のところはお引取りいただけないだろうか？　ここは日を改めてということ……」

三人の男は視線を互いに交わした。そして、先程から、最も多くフウルウと言葉を交わしている男が、一人で答えた。どうやら、こいつがこの三人組の長であるらしい。

「それはできない」

「名乗った以上は、是が非でもこの娘を連れていきたいということか？　なるほど、その反応は《再生への導き手》らしくはあるな」

フウルウが苦笑すると、彼の咽喉元目掛けて射刀が飛んできた。しかし、先程、あの状況でもフウルウは射刀を掴み取ったのである。件の男がともに投げ付けたところで、フウルウに当たるわけがない。余裕でフウルウは射刀を掴み取る。と、同時に……。

『夔よっ』

あの『闇色の大鎌』を振りかぶって、鶴ちゃんが言霊を結ぶ。簡易言語巫術が発現したのだろう。鎌が振り下ろされた瞬間、先程のように《夔》はその形状を変えた。そして、鎌の刃から二本の触手が伸びる。その触手はシャービス亭の中——二人の男——に向かい、伸びていく。蛇のような動きと矢のような速さで。

その先端に触れるとどうなるか？

生憎、それを試してみる度胸は二人の男にはなかったらしい。大鎌が見せる尋常ならざる変化に驚きつつも、彼らは慌てて、回避行動をとる。

男達の判断は賢明だった。触手を躲した二人の立っていた場所には、槍のように地面に突き刺さった《夔》の触手と、その触手に抉られた跡が克明に残っていた。

だが、《夔》の触手はもぞもぞと地面から、這い出てくる。さらに鶴ちゃんが瞑目し、開眼し、言霊を唱えると共に柄を翻す。すると、《夔》の刃から、さらに二本触手が生えてきた。そして、合計四本になった触手は二人の方を向く。外の男は触手を操っているであろう鶴ちゃんに何かを仕掛けようとしていた様子だが、間に立ち塞がるフウルウが先程その一端を見せた傀儡の力で、不動無言のままそれを抑止している。

焦ったのは男二人である。彼らは低い怯えの声を漏らして、シャービス亭から、外に出た。おそらく、狭い室内では回避しきれないと考えたのだろう。フウルウ、ディーナザード、鶴ちゃんの三人は彼らを遮れる場所に立っていたが、前二者はあえて、彼らを外に出した。

ディーナザードにしてみれば、このシャービス亭は貴重な財産だし、フウルウにとっても大切な寝床だ。この中での荒事は避けたい。また、こちらは現状維持が目的——長期戦になって、人が集まれば、不利なるのは向こうの方——なので、たとえ相手の三人が合流、戦力集中させる結果になったとしても、包囲されている状況を脱せられる利点は大きい。また、シャービス亭の壁を背中にしていれば、退路を断たれてしまうが、同時に背中 of 安全を確保できる。何より、相手の三人に退路を与えることができる。とりあえず、こちら

は連中に立ち去ってもらうことが目的なのだから、相手には退却という選択肢を残しておきたい。大体、相手に『死兵』になってもらっては、どんなにこちらの戦力が充実しているとも、手に負えなくなる。

……と語りあわずとも、フウルウとディーナザードの戦術上の意見は一致していた。あるいは過去の師弟関係において、ディーナザードはフウルウから、(不本意だが)多大な薫陶を受けているのかもしれない。ちなみに、鶴ちゃんだけは袋の鼠の二人を殺すつもりだったらしいが、結局は大人二人に従う形になった。

ついでに鶴ちゃんは舌打ち一つで《夔》から伸びた触手を引き戻し、先ほど同じ過程で闇色の大鎌の形に戻した(どうやら、この『闇色の大鎌』が基本形態であり、ここからの変化には一定の制限があるらしい)。

一方の男たちは懐から刃物を取り出した。さすがに長物はない。皆、隠密携帯向きの短刀ばかりだ。

そして、三対三で、向き合う形になる。

「では、始めようか！」

意外なことにフウルウが真つ先に飛び出す。

大地が軋む。やはり、その力は異常だった。

フウルウの身の丈は三ジラーファ(百八十センチメートル)に三イスヴァ(九センチ)程足りない。重さは服を除いて十八デイルハム(五十四キログラム)ほどだ。大した重さではない。そんな彼の踏み込みは技巧など何もない力任せのものだった。さすがに飛び跳ねてしまわないように重心は落としているようだが、それだけだ。

それなのに、地面には大きな足跡が残る。舗装こそされていないが、多くの村人に踏み固められた草さえ疎らな『道路』に、まるで、砂浜のような足跡が着いていく。

筋力が極端に肥大しているのだ。

三人の男に明らかな恐怖が走る。だが、フウルウは彼らに考える暇を与えない。

それだけの筋力で大地を蹴っているのだ。当然、瞬く間に男たちの距離は狭まる。

まさに神速、まさに縮地。

そして、フウルウが大きく右手を振りかぶる。と、いうか、大きすぎる。

狙われた男は怯えながらも、あっさりとその必殺の拳撃を避ける。それも、綺麗に右斜め後ろに、だ。明らかに彼には体術の心得があった。

以後しばらく続いた肉弾戦はその繰り返しだった。とにかく近くににいる男から順に、フウルウは力任せに殴りかかり、蹴りかかる。素人丸出しの攻撃なので、男たちはあっさり躲す。しかし、フウルウの身体能力が異様過ぎるために反撃にかかれぬ。ディーナザードにはその気持ちかわかる。拳を突き出したとしても、それが効くとは思えない。仮に刃物であっても、今のフウルウを一撃では仕留められないだろう(槍などでフウルウの射程外から、仕掛けられれば、話は別だが、連中にそんな長物の用意はない)。おまけに、動きは素人でも、とにかく、速い。そもそも、当てられない見込みが大きい。避けられるだけならいい。だが、突き出した腕を掴まれたら、あの圧倒的な膂力にどう抵抗しろというのだ？

そんなわけで、一進一退が続く。距離を置こうとする男がいれば、フウルウはすかさず駆け寄る。とにかく速いので、言語巫術は勿論、弾弓や射刀の類も使えない。

まるで、鬼ごっこだ。だが、フウルウは一人で、三人を制していた。

しかし、同時にディーナザードは

——先生、酔っている？

と思った。無論、酒にはない、力にだ。格闘技を習い始めた少年に似ている。ディーナザードは『これだから男は』と差別的なことを思った。大体、接敵しすぎだ。これでは、後方の鶴ちゃんが巫術での支援をやりにくくて仕方がない。強力な巫術を使えば、フウルウを巻き込んでしまう。

ほら、今だつて、極度に敵と接近して、弄ぶようにニヤニヤしながら、顔を近づけ……。

——え？

鶴ちゃんは気付かなかったようだが、ディーナザードは気に留めた。

男たちの長の横を通り抜ける際、フウルウはその唇を彼の者の耳に寄せた。彼に男色の趣味はないはずから、接吻をしたがったというわけではあるまい。何か、他に理由があるのだ。例えば、

——何かを囁いた？

よくよく考えれば、フウルウが真つ先に飛び出したのもおかしい。

「……退くぞっ！」

男の声が響く。ディーナザードが考えている間に三人は、背を向けて、駆け出す。フウルウが「待てっ」と叫び、鶴ちゃん・男たちの間に入って、彼らを追い駆け出す。

その途中で、フウルウでえらく派手に転んだ。

尋常ならざる脚力であるために、土ぼこりはもくもくと立つ。

その時、風に乗って、ディーナザードの耳に男たちの声が届いた。元々、彼らの言葉遣いはやけに古臭いものばかりだった。が、今度のそれはその傾向にさらに拍車がかかっている。

——この韻律……祝詞？ やばい……！

ディーナザードは鶴ちゃんの首根っこを掴んで、回避行動に移る。

次の瞬間に男たちが言霊を結ぶ。

『其は四つ目の御柱、下れ、大神おおかみ《バラシヤクシュ》』

『其は五つ目の御柱、下れ、大神《ルガルディメルアンキア》』

『其は六つ目の御柱、下れ、大神《ナリルガルディメルアンキア》』

刹那の後、天空より、光が降り立ち、大地が爆ぜた。

それも、一度ではない。三度続けて——いや、三柱並んでである。

おかげでその三つの柱の近くにいた男たちの姿は光とそれに伴う土煙に隠れてしまう。

——言語巫術……！

しかも、三人とも、かなりの腕前だ。あの連中は例外なく、巫術師だったということになる。であるならば、彼らは本当に《再生サラーフ・アルムイードへの導き手》かもしれない。

「フウルウさんっ」

混乱の中、ただ一人鶴ちゃんだけが声を挙げた。

巫術の効果が収まった後、残されたのは倒れたフウルウの姿であった。

見事な退き際で、三人の男は去っていった。

デイナーザードの的確な判断とフウルウの用意した茶番のおかげか、あるいは元々そういう巫術だったのかはわからない。しかし、とりあえず、雷光——勿論、威力は自然現象のそれに比べると卑小極まりない電流——による被害は見た目の派手さに反して皆無だった。

そもそも、誰一人、あの雷光に命中していない。フウルウですら直撃を受けたとうわけではなかった。

ただし、フウルウは『転んだ衝撃で、身動きがとれない』と主張した。

そんなわけで、今度はフウルウをシャービス亭の寝台に運ぶ羽目になった。勿論、鶴ちゃんが使っていた寝台ではなく、フウルウの自室の寝台である。だから、周囲に溢れる書籍の山が邪魔で仕方がない（ちなみに鶴ちゃんはちらちらと書籍に目を向けていた）。ついでに、運ぶのが鶴ちゃんの如き美少女ではなく、フウルウの如き野郎であるというのも、やる気を削ぐ。フウルウの演技が下手であるのも、さらに拍車をかけた。

寝台に倒れこむまでに、フウルウは自分に外傷はなく、大事でもないと心配する鶴ちゃんを安心させた（当たり前だ）。ついでに、自分が鶴ちゃんの巫術支援を妨害するような格闘戦に持ち込んだのを謝罪し、『いや、生まれこの方、あんな肉体的強者になったのは初めてだね。つい、興奮した。次からは気をつけるよ』と低頭した（嘔吐け）。では、何故、すっ転んだのかというと……。

『『全力』で駆け出そうとしたら、脚がおかしくなった。なんだか、痛い。さっきに比べると、大分収まってきたがね』

勿論、デイナーザードは

——わざとらしいな。

と思ったが、黙っていた。

「普通に歩行する分には問題ないのですね？」

「ああ」

「では、脚部の高機動形態への移行過程に問題があるのでしょうか。……おかしいですねえ。万全を期したはずですが……」

「先程、君の体重を支えて二階から降りた時には問題なかったが？」

「《夔》を抜いたからかもしれない。あの着地の時点ではまだ《夔》をフウルウさんの中に入れていましたからね。わたしがこの大鎌を使うために、《夔》をフウルウさんから抜いたために、今まで、その娘に任せていた生理機能の処理負担がともにフウルウさんにかかったのでしょうか。もうしわけありません。元々、わたし、殿方の下半身への介入は苦手なんです」

「色々、ないからねえ」と、フウルウが柄にもない冗談を言った。

制裁措置として、デイナーザードはフウルウの脳天に拳骨を叩き込む。

すると、鶴ちゃんが「あわわわ」とその容赦のない拳骨に心配しだす。

デイナーザードはますます苛々する。どうして、こんな美少女が三十路過ぎの野郎を気にかける？ 世の中、間違っている。

そんなことを考えていると、鶴ちゃんは右の人差し指でフウルウの額に触れる。その細

い右手には法衣の袖に隠れて、螺旋状に巻きついた《夔》の影があった。『ちよつと、調べさせてくださいね』

その一言で、フウルウの体が内側から淡い輝きに包まれ、その光は細い指をつたって、鶴ちゃんに流れ込む。その鶴ちゃんの唇は小さく動いていた。どうやら、言語巫術の一種らしい。フウルウ自身は既に慣れていくように揺るがない。またもや、驚いたのはデイナーザードのみである。

——精霊に体内をくまなく走破させて……それで、検査したフウルウの生理情報を受け取っている？ しかも、精霊のネットワークを利用して、脳で直接？ 五感に変換せずに？ そんなこと、人間に可能なの？

「おかしいですね」鶴ちゃんが言霊を紡ぐのをやめると、光も消えていった。「問題はないはずなのですが……」

「そうか、まあ、事が痛みだから、私の精神的な問題なのかもしれない」

「了解しました。では、しばらくは様子見と行きましょう。この手の不具合は結晶細胞が定着すれば、解消されることも多いですし。何かあれば、また、言ってくださいね」

「《夔》はどうする？」

「今のフウルウさんに必要なのは《夔》による生理機能補助というよりも、単純な安静です。何度も《夔》を出し入れすると傷口を悪化させることにもなりかねませんし、この娘には、このまま、わたしの造血器官を手伝わせることにします」

そういつて、鶴ちゃんはまたぶつぶつと祝詞を唱え始めた。その言霊にしたがって、《夔》はビクンビクンと蠢動を始める。

デイナーザードはどうしても、その《夔》に目が行ってしまう。

視線に気付いたのか、鶴ちゃんはデイナーザードの方を見て、祝詞を休止する。

「ご覧になりますか？」

少女はお気に入りの髪飾りを見せるように、その禍々しい『死神の大鎌』をデイナーザードに差し出す。どうやら、デイナーザードが興味を抱いたのだと、鶴ちゃんは解釈した様だ。

「あ、ありがとう」

たしかに、その解釈は間違っていないが、流石にデイナーザードも、その大鎌に手を伸ばすことができない。少し距離を置きながら、思わず、本心とはかけ離れた口にしてしまう。

「く、クイってというのがこれの固有名詞なのね？」

「ええ、わたしの《無支祈》なんです」鶴ちゃんはいつもの品のいい笑みを浮かべ、「可愛いでしょう」

「……世界には様々な審美眼があるからねえ……ちよつと、フウルウ」

多少、おろおろしながらも、可愛いという形容詞を聞いて、デイナーザードは事態の把握には鶴ちゃん本人よりも、常識を（少しは）わきまえているフウルウに尋ねる方が早いと判断した。

「何なのよ。あれは？」

「直接、あの娘に聞かないということは、私の個人的見解を望んでいるのだね？」フウルウは鶴ちゃんに聞こえない様に彼女に耳打ちした（デイナーザードの意図を理解している

ようだ。「なら、適切な判断だ。正直、私にもよくわからないが、鶴の説明はもっとわかりにくい」

「アレは……精霊結晶——結晶細胞よね？」

ディーナザードも鶴ちゃんに聞こえない様に話す。

「そう。アレの正体はおそらく恒常的半固着化状態の表現型可塑性精霊結晶細胞の一種。《女媧泥ユニット》理論の完成形……だと思う。」

「アレが人為的に作成され、制御されているの？」

信じ難い。今日はその言葉を、何度も口にしては否定されているので、黙っていたが、それがディーナザードの正直な感想だった。

精霊が——人間からの干渉を含めた——状況に応じて、自分達の生体構造を変化させることはよく知られている。だからこそ、精霊はこれだけ多彩な行動をとることができる万能生物なのだが……、

「……私もこんな形状というか、運動能力というか、変態能力をもった精霊は見たことがない」と、フウルウは即答を避ける。「確かに精霊を固着させて、少々特殊な性質を持たせることは可能だ。けれども、そうやって作り出された精霊結晶はせいぜい、普通の金属よりも固くて軽いつか、あるいはその電導率、断熱性等を調整できるとか……その程度で、こんな尋常ならざる代物は……ああ、そういえば、ある種の黴かびの幼体に似ているかな。もつとも、大きさも、運動の速度も、桁違いだけ。まあ、とにかく、疑問はあるものの眼前の現象と鶴の言葉を総合すると要するに……」

「アレをあの娘が操っている……と？」

素人のディーナザードが思いつく限りでも、山程の問題がある。だが……、

「私の理解の範疇ではそうなる」

「……たしかに形状や硬度が何時でもどこでも、自由自在っていうのは便利よね」

「ああ。それだけでも、十分、画期的だ。包丁の形にすれば包丁として、ああいう風に鎌の形にすれば、鎌として使える。ああ、そういえば、鎌の形状が基本形態らしい。最近はアレを持ち歩いていると、目立つということに気付いて、さっきの応用で、縄状にして、法衣の内側に隠している様だけ……」

「というか、そもそも、何で、あんな鎌の形にしたのよ」

形状が思いのままなら、最初から、もつと、こう、心臓の悪い人にも、広く受け入れられる様な形にすればいいではないか。鶴ちゃんのような見目麗しい可憐な少女が、あんなヌルヌル、グチャグチャの肉塊からできあがった不気味なでっかい鎌を持ち歩いていれば、注目されるのは必定だろう。……まあ、仮に、ごつい小父さんが持ち歩いていても、それはそれで人目を引くだろうが……。

『『可愛い』からかもしれない』フウルウは反論を封じる様に、間を置かず言葉が続ける。

「それに、包丁にしても、鎌にしても、あの娘にしてみれば、副次的な機能でしかない」

「わかるわよ。あの娘は巫術師だもの」ディーナザードはフウルウの勝ち誇った顔から、瞳を逸らした。「あれは巫術的媒体ね。でも、ただの巫術的媒体ではない」

周囲の精霊を使役することで成り立つ巫術は当然、周囲の精霊の数にその力を大きく左右される。同じ干渉力ならば、精霊の塊である精霊結晶を身につけている方が有利だ。そしてこれは自らの能力の安定化にも貢献する。特に精霊密度の低い空間では結晶状態の精



霊だけが頼りということもある（言霊や祝詞も、同じ干渉力で使役できる精霊を効率よく使うための技術で、精霊そのものが存在しないと意味が無い）。加えて、肌と密着していれば、体内の精霊からの増幅信号の外部への中継点としての役割もある。他にも色々理由があるが、とにかく、巫術師が自らの能力を十全に発揮するために、精霊結晶の杖を持ち歩き、精霊結晶の飾りを身に付けることは、よくあることだ。

しかし、前述の様に鶴ちゃんの《夔》はただの精霊結晶ではない。

「あれが《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法》の正体？」

「ご明察。《夔》は魂が封じられている……とでもいうべきかな？ 見た目は《ラムダ》に近いが、中身は私の故郷で言うところの《霊保》あるいは《神保》というやつに近い。

精霊結晶——の一部を、あの尋常ならざる運動、変態機能とはおそらく別に——ヒトの脳細胞に似た状態にして、精神という名のネットワークを形成させ、そこから創造される擬似人格——魂ミタマを使役する」

魂の条件が何かはわからないが、要は精霊が反応してくればいい。その条件を抽出し、それに従った（おそらく、脳神経系に似た）ネットワークを精霊に造らせる。元々、精霊のネットワークは脳神経系に通じるところがあるので、その応用だという。

「……もしかして、その擬似人格に精霊を使役させているの？」

「御明察。《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法》の『外部演算因子』としての役割を《夔》が果たしているらしい」

「……アレと情報共有した人格構築——ああ、精霊に擬似人格を構築させるから『人格構築型』なんだ……」

するとフウルウは「やはりその聡明さだけは素晴らしいな」と拍手を始めた。

「……先生に褒められるとやる気がなくなるの何故なんでしょうね？」

「だが、思索を止めることができない。人間とは往々にしてそういうものさ」

もったいぶった口調のフウルウにディーナザードは心底苛立った。が、彼の言葉は正しい。

既にディーナザードは『連鎖性』という部分の意味も理解し始めていた。

「……あたしなら『再帰的』と名付けるわね」

おそらく、そうして構築した擬似人格に精霊への干渉を行わせる。そして、さらにその精霊にも擬似人格を構築させて——という工程を『連鎖（再帰）』させてに繰り返す。

そうやってネズミ算式に魂を増やし、運用可能な干渉力を増やすのだ。

「人間だって、一人より二人、二人よりも、三人、力を合わせれば合計の干渉力は増す。

あの中にある擬似人格たちの無数の魂ミタマこそが鶴ちゃんの莫大な干渉力の源というわけね」「ああ。発案者である女媧娘々は、かつての貴人たちが『神の声』を聞いたとされるのも、こういった擬似人格の声、ある種のフィードバックだったと推測している。『預言者』と呼ばれる受動的巫術師についても同じことだ——と」

『神の声』——それで《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法》の通称が《神憑り》と」

実際、それは数多の人格が共存している精神集合体というべき異質な存在らしい。また、一時的だが擬似人格同士の情報共有もさせうるから、干渉力の指向性も十分だという。

これで《傀儡》を維持する際の莫大な干渉力と精霊使役処理能力の不足を補える——か

否かの判断は素人のディーナザードにはつかないが、それが可能になるかもしれない——技術革新なのだろう。

「あの尋常ならざる運動というか変態もそうやって使役した精霊にさせているんだろうな。《夔》が個体として、独立していれば、鶴はあまり細かく面倒を見る必要はないし、何より、莫大な干渉力の裏付けがある」

「じゃあ……《夔》という固有名詞が内包される《無支祈》という一般名詞は精霊結晶で造られた人造生命なの？」

「ほぼ正解」フウルウは条件付で肯定した。「厳密には、それらの中でも特に《神憑り》が可能な種類を《無支祈システム》と呼ぶらしい」

もつとも、この《神憑り》の恩恵がなければ、結晶細胞は既存生物の生理機能の一部を模倣させるだけで精一杯で、とても単独での人工生命とは言いがたいという。その意味ではディーナザードの定義も誤りではないらしい。

「だが、人造生命という点では、先天的、後天的という差はあっても、今や鶴の傀儡たる私も同類だからね。義理の兄ってとこかな？ いや、姉か？ 有性生殖しそうにはないから」

ディーナザードは驚かなかった。実際に《夔》の本質を垣間見た後では、色々麻痺しているのかもしれない。

「……でも……」

「細かいところは気にしない方がいい。技術的な詳細は私の専門外だし……そつちの方がいいかもしれない」

フウルウはそういつて強引に話を終える。

「鶴、ディーナザードは十分に見聞したとき。早く、彼女を取り込んだらどうかね？」

「え？ ええ、わかりました」二人の内緒話がやけに長かったことに、怪訝そうな顔をしながらも、鶴ちゃんはフウルウの提案を受け入れた。あるいは、ディーナザードが結局、あの《夔》に触れようとしなかったことを残念がっているのかもしれない。「……《夔》」

再び少女がその名を口にすると、『死神の大鎌』は先刻とは逆に鎌の形から、あの不気味な肉塊に変化する。そして、その肉塊——《夔》は鶴ちゃんの手に向かって、這いずって行き、

「……んっ」

と、いう鶴ちゃんの小さな呻き声と共にその腕の中に潜り込んだ。比喻ではない、《夔》はその先端を針の様に変化させ、鶴ちゃんの腕の中に入り込んだのだ。

一瞬、遅れて、ディーナザードが鶴ちゃんに駆け寄ろうとするが、フウルウがそれを制止した。

「大丈夫だ」と、言うてから、小さな声で、「鶴の説明によるとね」と付け加える。

「繰り返になるが、昨日の大怪我で、私の体は大変危険な状態だ。ある意味、死んでしまったとも言える。そのため、鶴の《傀儡の術》だけでは、とても肉体の崩壊に追いつかない。そこで《夔》を私の体の中に入れて、体内から直接、生理機能を無理矢理整えていた。

まあ、あれの正体ははっきりしないけど、少なくとも、鶴向けに調整された特殊な精霊結晶だというのは間違いない。《傀儡の術》の補助にはもってこいというわけさ。で、今、ようやく、鶴の《傀儡の術》だけで何とかなるくらいまで、私の体の調子がよくなったので、

今度は、貧血の――ああ、昨日、大量出血状態の私に輸血した代償として貧血になった――  
―鵺の造血機能を手伝わせるために、鵺の体に移し替えたんだ―

「……とにかくあの娘は大丈夫なのね」

それはフウルウに対する確認ではなく、ディーナザードの自身に対する反芻だった。

たしかに、鵺ちゃん是比较的平然と、《夔》を受け入れていた。時々、「あんっ」とか「くうう」とか声を漏らしていることには、聞き耳を立ててしまったが、とりあえず、気にしないことにした（フウルウは顔を背けている）。その《夔》は鵺ちゃんの白く細い腕の内側で蠢き、葉脈の様に広がりながら、少女の胸元に向かった――と、思われる。《夔》のせいだと思われる皮膚の膨らんだ部分が、まるで移動し、服に隠れて見えなくなつた。色々な意味で、《夔》の行き先を覗いてみたかったが、フウルウが許可しないだろう。残念に思いつつも、一つの疑問が解決するのをディーナザードは感じた。

「ひよっとして、さっきのしこりは、その《夔》……」

「しこり……あ、《夔》の端末のことですか」鵺ちゃんは何やら、納得した様子で、急に顔色を変えた。「では、先刻のあれは《夔》を？」

「その一部を追いかけていたみたいね。あたしは」

「これは……とんだご無礼を」鵺ちゃんはぺこりと頭を垂れた。「諸般の事情で、いつも《夔》の別け身をわたしの体中に宿しているのですが、あの娘ったら人見知りが激しくて」

諸般の事情とやらはディーナザードにも検討がついた。フウルウも同じだろう。自分の神経系と《夔》を直接結合させて、ネットワークを密にすることで、周囲の精霊に対する干渉力を高めるとか、《夔》本体との情報連結の中継点としての役割といったところだろう。この少女ならば、ありえないことではない。『あの娘』が《夔》を指しているのだとしたら、『人見知り』の言葉の意味が微妙だが、まあ、動物性なら、人間に触られて、逃げ出さない方が珍しいのだ。理解出来ないわけではない。

「それで、逃げられちゃったわけか」

「本当にごめんなさい。妙な誤解までして」

いまいち話が見えないフウルウは怪訝そうな顔をしているが、丁寧にお辞儀する少女にディーナザードの中で強い想いが沸き起こる。

――ああ、やっぱり、可愛い！

その事実の前には人間離れた干渉力や《夔》の正体など、些細なことだった。

「いいのよ」ディーナザードはその唇を鵺ちゃんの白い耳に触れるか触れないかという所で囁いた。「そんなことよりも、汗かいたでしょう？　ね、湯浴みでもしない？」

「えっ、あっ」

ディーナザードの吐息に鵺ちゃんはピクンと体を震わせる。顔を赤くした少女はしどろもどろになる。

「あああ、あのっ……」

そんな鵺ちゃんの反応にディーナザードの情欲はますます高ぶる。

「ね、いいでしょう？」ディーナザードは舌先を皮膚にぎりぎり触れない距離を保ちながら、器用に耳の中に潜り込ませる。「あたしが鵺ちゃんの体を綺麗に、った、たたた！　痛い！　痛いですよ、先生！」

「どこが誤解だ。まったく、油断も隙も会ったもんじゃないな。君は」

フウルウはデイナーザードの三つ編みを後ろから引っぱり、無理矢理、鶴ちゃんから引き離す。

「第一、体はさつき君が拭いていただろう？」

「あ、さては覗いてましたね！」

「そこにも汗を拭きましたよって感じに濡れた布巾がある」

「ちっ」デイナーザードは自分のうかつさに舌打ちした。

「……鶴、まだ、体調は万全じゃないんだ。この小娘は無視して、さっさと寝なさい」

鶴ちゃんは、しばらく二人の大人の顔を見比べていた。だが、デイナーザードが拗ねた顔をしてはいたものの、フウルウの言葉を否定しなかったのも、とりあえず布団に入ろうとした。が、

「待て」制止するフウルウ。「だから何故そこで君が鶴の布団に入る？ デイナーザード」

「添い寝よ。いけない？」

「いけない」

「ひよつとして、フウルウ」デイナーザードはわなわなと体を震わせ、「やきもち？」

「……鶴にやましい事をしないという保証があれば、君に任せたいけどね」

「さつきから、随分と偉そうね。早くも父親気取りというわけかしら？」今度は嫌味ったらしい流し目で、フウルウを一撫でした。「あるいは恋人気取り？」

「それは違います。デイナーザードさん」玲瓏たる声で少女は話に割り込む。「フウルウさんは、私の父親でも、恋人でもありません。わたしの下僕です」

「……あのなあ」

控えめに異議を唱えるフウルウ、笑いを堪えているデイナーザードを無視して、鶴ちゃん言葉が続けた。少々熱っぽい口調で、しかし、気負った様子もなく、至極当然な様子で。

「わたしに父親はいませんし、わたしの想い人はお師匠様、唯一人です」

前者についてはどういう意味か微妙だったが、後者からは少女の一途さがひしひしと伝わってくる。自然とデイナーザードは——実に珍しい——裏のない微笑がこぼれた。

「お師匠様のこと、尊敬しているのね」

「はい！」頬を赤く染めながら、とびっきりの笑顔で鶴ちゃんは答えた。「あの方の薫陶を受けたことは、わたしの大いなる誇りです！」

デイナーザードは軽い嫉妬を覚えた。まだ会ってから、一日も経っていないのだから、鶴ちゃんにとってデイナーザードの存在など、『いい人』の範疇を越えるものではない。当たり前前だ。しかし、どれだけ年輪を重ねようとも、デイナーザードは鶴ちゃんの中で師母を越える存在には、なりえない様な気がする。

しばし、デイナーザードは考え込んでから、「その方の名を伺ってもいいかしら？」と尋ねた。フウルウからの忠告が気がりだったし、師母の名を自分が知っている可能性など皆無なのだから、聞いたところで意味がないものの、聞かずにはいらなかった。鶴ちゃんが『師匠』と呼んでいるということは、鶴ちゃんの巫術は鶴ちゃんの師母から、教授されたものであるということなのだ。だが……、

「氏名を鵬翦、字を雛子」

その予想を裏切る答えは、鶴ちゃんではなくフウルウの口元からこぼれた。

「君には号の女媧の方がわかり易いか？」

「女媧……女媧娘々？」

「デイナーザードは金色の瞳を丸くした。表情がコロコロ変わるデイナーザードだが、今度の驚愕は毛色が違う。「あの微分積分を発見した天才数学者のっ？」

「お師匠様を知っていらつしやるのですか？」

「知ってるも何も……だって、その人は……っ」

フウルウの指がデイナーザードの唇の前に掲げられる。彼が沈黙を望んでいることを彼女はすぐに察する。

「博物学者というべきかもしれないね。もつとも、当時の学者は悉く博物学者だったし、探究士という呼び方が主流だったけどね」フウルウは落ち着いた口調で、「ちなみに鶴、君の師母殿は今年でいくつかな？」

「乙女に歳を尋ねるのは失礼であるだけでなく、失敬である……って、お師匠様が言っていました」

思わず、デイナーザードは

——乙女って……！

と、口に出そうとした。が、思い留まる。この場はフウルウの顔を立てることにしたのだ。

「そういうわけだよ。デイナーザード」

フウルウはここから先の話は二人だけでしようと思案していた。